

令和元年6月26日現在

機関番号：32644

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K04514

研究課題名(和文) 読解力育成を目的とした教材の足場づくりの研究：語彙分析から

研究課題名(英文) A study of instructive scaffolding to promote reading literacy based on vocabulary analysis

研究代表者

鈴木 広子 (Suzuki, Hiroko)

東海大学・教育開発研究センター・教授

研究者番号：50191789

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、英語学習者が日本語訳を介さず「読む」という認知過程を経験することを目的として授業を設計し、その有効性と学習者の成果を評価した。研究課題は、学習者にとってのリーディング教材の難易度の指標、足場づくりの設計、リーディング内容に関する学習者の再構築過程を通じた理解度の変化、の3点について明らかにすることである。学習者の背景知識を活かせる内容を選択し、足場掛けとしてリーディング活動を組み込むことで、語彙と構文を効果的に学び、表現活動(ライティング、スピーキング)を通して思考し、学習者自身が意味を生成して言語化することで、内容を深く理解できることを実証的に示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

仕事や研究・教育の場で使える英語力、OECDが定義する読解力に到達するには、高校と大学の英語教育はどうあるべきかを問い直している。豊かな文脈と学習者の背景知識に支えられたリーディング活動を通して、読み手である学習者自身が内容の世界をイメージし、その意味を言語化する再構築過程を経験する。このようなトップダウン・アプローチの英語教育における足場掛け活動を設計し、その有効性を実証的に明らかにした。

研究成果の概要(英文)：English read texts in English without mediating Japanese, and to develop an educational model. The target reading-writing course for this study was designed so that learners would experience "authentic" reading according to the model; it was then assessed to see its effects. The following three research activities were conducted: complex analyses of reading texts to identify their difficulty levels for L2 readers, designing instructive scaffolding activities and an analysis of the learner English to see how deeply they comprehended through reconstruction processes of what they had read. The analyses demonstrated that situated reading and speaking or writing activities about the reading texts in the course enabled them to effectively learn vocabulary and sentence structures and to deepen their reading comprehension through transforming their own meanings and verbalizing it to confirm their comprehension.

研究分野：教育心理学、応用言語学

キーワード：リーディング 学習 語彙分析 EAP 生成過程 プロトコル分析

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 高大連携の教育改革が進む中、英語教育は幅広い内容について発表・討論・交渉などができる言語力の養成を目標としており、充実したパフォーマンスを行うための準備段階での読解力(reading literacy)は重要である。リーディングを通して、内容と言語知識の習得だけでなく、次の活動に応用するための思考、分析、判断、情動が伴うからである。ところが、中学校・高等学校の英語の授業改革・教師教育に携わってきた研究代表者は、高校生は英語を「読む」、つまり、第一言語(日本語)で行われるような読解課程を経験できているのかという疑問をもった。実際、研究代表者らが担当する大学の英語の授業の学生の多くは、読んだ内容に関する質問に対して読んだ英文から表現を抜き取って解答するので、個々の情報は得られても、主旨、作者の意図、文脈に埋め込まれた言語表現の解釈ができなかった(鈴木, 研究業績 2010)。

(2) 第一言語のように、第二言語である英語で読んで深く理解する教育のあり方を明らかにするために、社会文化的アプローチ、バイリンガリズム理論から、教育開発のための新たな視点が必要だと考えた。その視点とは、言語を使って特定の行為が遂行される、言語を介した多くのインプットから使用者(子ども、学習者)の内に意味を生成し、その意味を言語化する過程、言い換えれば、使用者にとって明確で豊かな文脈の中で主体的に言語を使う(理解する、表現する)経験を通して、使用者の言語が発達するという考え方である。

(3) グローバル社会に対応する英語力の育成という観点からは、学習者の語彙不足も大きな問題である。学習指導要領によると高校卒業時までには 3,000 語が紹介されるが、実際に、研究代表者らが担当する授業の学生の語彙力が BNC/COCA2000 語レベルであると仮定しても、大学入学後のやや専門的な英文を読むことはできない。学習者の言語力と授業で扱われる教材の英語とのギャップを埋め、読んで深く理解するためには、読み手の背景知識を引き出し、読み手が自分の立ち位置を把握できる豊かな文脈の中で、段階的に深く理解するための足場掛けのリーディング活動を設計する必要があると考えた。

引用文献

鈴木広子(2010)「リーディング活動における状況論的理解と言語生成」Educational Development: 東海大学教育開発研究所、4、65-90.

2. 研究の目的

「読む」過程、日本語を介さず深く理解する認知過程を経験するために、英語学習者はどのようなリーディング活動を積み上げる必要があるのかを、リーディング理論、バイリンガリズム理論、社会文化的アプローチから明らかにする。そして、グローバル社会に対応できるリテラシー、いわば PISA 型読解力の育成を目的とした英語教育における足場掛けの設計と教材を開発・評価することが目的である。1990 年代以降、「ジャンル」「リテラシー」を再定義した研究が進み、読み手の複合的スキーマが生起する豊かな文脈に支えられた理解という、読解力の新たな側面を明らかにしている。そこで、複合的文脈に支えられた深い理解という観点から、次の 3 点を明らかにする。

(1) 既存のリーディング教材の問題点

(2) 語彙と文脈と統合的なリーディングの難易度との関係

(3) 真正な(authentic)なリーディング活動を可能にする足場掛け活動(教材)の設計とその教育的効果の評価

3. 研究の方法

(1) 検定教科書の分析

大学入学前までに学生がどのような英語力を身につけているのかを探る一つ手段として、検定教科書(高校英語)のリーディング教材としての難易度を分析した。各レッスンの英文の使用語彙の頻度と出現位置を集計し、生徒にとって本文中の未知語の割合を算出して全体の傾向を把握して、読解過程の可視化を試みた。Communication English I, II, III の教科書、初級、中上級レベルから 11 社を分析対象とすることになっていたが、部分的に教科書内の英文の総語数・リーディングの英文量、教科書内の使用語彙の大きさ(学習指導要領では、中学の語彙数は 1,800 語、高校の新出語彙は 1,200 語と定められている)タスクの量と難易度(認知負荷のレベル)を分析した結果、教科書間に顕著な違いが見られなかった。そこで、採択率が高い方から 6 社の Communication English I, II を分析対象として、次に、英文読解のための教科書内のタスク分析を行った。高校の英語教員が設計したプロジェクト型授業用の教材と生徒のワークシート、作品に書かれている英語のデータを収集することができた 1 社の教材に分析対象を絞り、リーディング教材の英語から生徒が書いた英語まで一貫した分析を行った。リーディング教材・学習者英語における使用語彙の大きさと頻度は AntWordProfiler version 1.4.0w (Anthony, 2013) と COCA/BNC 25,000 family lists (Nation, 2012)、内容に関する設問に解答する学習者にとっての難易度はタキソノミー (Anderson et al., 2001) と JACET8000(相澤他, 2005)を分析ツールとした。以上の検定教科書の語彙および設問分析の結果をふまえ、大学入学時の学生が高校までにどのような言語・コミュニケーション活動を行ってきたのかをみるために、パイロット調査した。アンケートは、英語力(検定試験結果)、英語使用経験(例、留学等)多様なタイプの言語・コミュニケーション活動の経験、学び方および英語学習に対する認識の 4 項目に関する質問をオ

オンライン・アンケート・システムに設定した。

(2) 海外の教科書分析・授業視察

海外の英語教育および CLIL 教育の授業視察と資料収集を行った。2015 年 9 月初旬にフィンランドのコバスキュラ、2016 年 3 月初旬にウィーンとブダペストの初等中等教育の視察に行った。また、IB 教育の授業視察を目的として、2018 年 3 月 21 日、アメリカ合衆国ワシントン D.C. の Bethesda 市の公立学校の IB プログラムの授業を見学した。

(3) 大学のリーディング&ライティングの授業設計・実践・その評価

リーディング教材の分析対象である英文が学習者に読解過程を経験させるかを明らかにすることを目的として、ケース・スタディによる定性的分析を行った。基礎英語科目のリーディング関連の授業を受講する大学生の英語(データ)を収集し、リーディング内容の再構築に現れる学習者英語の特徴と変化、具体的には、オーディエンス、内容、結束性、文構造、語彙、文法について研究者らの個別評価により分析した。

引用文献

- Anderson, L., & Krathwohl, D., et al (Eds.) (2001). A Taxonomy for Learning, Teaching, and Assessing: A Revision of Bloom's Taxonomy of Educational Objectives. Boston, MA: Allyn & Bacon.
- Anthony, L. (2013). AntWordProfiler (Version 1.4.0w) [Computer Software]. Tokyo, Japan: Waseda University. Available from <http://www.antlab.sci.waseda.ac.jp/>
- Nation, P. (2012). Information on the BNC/COCA lists. Retrieved from: http://www.victoria.ac.nz/lals/about/staff/publications/paul-nation/Information-on-the-BNC_COCA-word-family-lists.pdf
- 相澤 一美・石川 慎一郎他 (2005) JACET8000 英単語 「大学英語教育学会基本語リスト」に基づく 桐原書店

4. 研究成果

(1) 検定教科書の英文を日本語を介さず理解し、その主旨や意図、さらには内容に関する判断・評価のできる深い理解をするには、教科書に設定されている質問やタスクに加えて適切な足場づくりが必要であることが示唆された。語彙分析の結果、単純にテキストに出現する未知語の割合からみると、生徒は英語を媒介して、日本語を介さず読むことができないと推測された(Suzuki, 2016)。また、本文の内容理解のための質問・タスクは、ほぼ本文の表現を抜き出せば解答できる形式であった。したがって、語彙分析では本文の使用語彙を再利用する機会になっていることが示されたが、学習者の学びという観点からみれば、本文中の個々の情報を確認するという浅い理解はできても、リーディング本来の目的である、要点の把握、書き手の意図の解釈、読み手の思考を促すような深い理解ができないことが明らかになった。学習者調査の結果、推薦入学により受験を経験していない学生は、高校の英語の授業で多様なコミュニケーション活動を経験しているが英語力が低く、一般受験により入学した学生は、言語知識の習得(理解と暗記)に偏った授業を経験している傾向がみられた。さらに、ほとんどの学生は、読んだ内容の応用、分析、評価といった活動を経験していなかった。

(2) 授業視察においてもっとも印象的だったのは、生徒の主体的な学びである。自分の背景知識を活かして発言する、教科書のタスクに個人で、あるいは生徒同士で取り組む、といった風景が多かった。外国語を使う授業では、学習者が主体的に理解し、考え、書く・話すなどの発表をするためには、そのコミュニケーション・ツールとしての言語表現(英語)の十分なインプットが必要である。つまり、語彙学習から学習成果を発表する段階までの活動を学習者が無理なく行えるように、活動の形式と難易度を段階的に上げる必要がある。その意味で、授業で使用されている教科書は学習者が主体的に学びやすい設計になっており、また、どの教員も「教える」のではなく、学習者の答や考えを引き出し、クラス全体をまとめながら授業全体の成果を明らかにして生徒にフィードバックするという関係性が見られた。

IB 教育の国語の授業は、生徒(高校3年生相当)の主体的な参加が印象的であった。リーディング課題の小説について、有志6人が前に出て議論し、他の生徒は議論を聞きながらワークシートに書いた自分の考えを修正していた。1章ではなく1冊を単位として読み、読んだ内容の確認だけでなく、生徒自身の解釈、さらには生徒同士の意見交換まで行う、タキソノミーのレベル5までの活動が展開されている実践を見ることができた。

(3) 「読む」という認知活動は、読んで理解した内容を読み手(学習者)の英語で再構築するまでの過程であると定義する。そこで、テキストについて1)文脈・場の共有、2)読んだ内容の再構築、3)2)についての他者評価、という3要素を入れたリーディング活動を設計・実践した。このようなリーディング活動は文脈や学習者の背景知識などを利用した俯瞰的理解から読む英文の言語的理解へというトップダウン・プロセスを強調した教育アプローチである。学習者の英語力と活動への参加度・タスクの理解度の違いによって、そのような教育アプローチにおける理解過程がどのように違うのかを分析した。

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

受動的な理解から思考して新たな知見、成果を生み出す活動へと段階的に認知負荷を高める足場掛けを設計した。学習者英語の分析については、これまで、内容(情報量)、結束性、文構造、語彙などの質的分析により理解度を評価してきたが、今年度はミックス・メソッドにより、質的データの統計的イメージ化を試みている。

引用文献

Suzuki, H. (2016). Scaffolding reading performance: Materials design based on textbook vocabulary Analyses, *International Journal of Curriculum Development and Practice*, 18, 53-66.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 9 件)

(1)河野円、鈴木広子、理系学生を対象とした EAP 教材の開発—足場掛けの設計試案—, Japan Association of Applied Linguistics in Japan Association of College English Teachers, (JAAL in JACET) Proceedings、有、1、2018、73-75

(2)鈴木広子、基礎英語科目における「学び」の問題点—大学初年次学生の学習者調査に向けて、東海大学教育開発研究センター研究資料集、無、2、2018、61-68

(3)鈴木広子、河野円、平井清子、PISA 型「読解力」養成を目的とした活動の設計: 高校英語教科書の分析から、JACET 関東支部紀要、有、4、2016、36-50

(4)藤枝美穂、ESP 教材用テキスト選定における自動英文解析ツールの可能性、統計数理研究所共同利用研究レポート、無、397、2018、71-83

(5)藤枝美穂、Sketch Engine を利用した ESP 語彙の分析、統計数理研究所共同研究レポート 421 教育・研究資源としての ESP コーパスを利用した多角的研究、無、421、2018、73-82

(6)Hiroko Suzuki, Miho Fujieda, Vocabulary learning grounded in an ESP community: Design and effect of a basic medical ESP course, *Breaking Theory: New Directions in Applied Linguistics: Proceedings of the 48th Annual Meeting of the British Association for Applied Linguistics*、有、48、2016、185-200

(7)Hiroko Suzuki, Scaffolding reading performance: Materials design based on textbook vocabulary analyses, *International Journal of Curriculum Development and Practice*、有 18、2016、53-66

(8)鈴木広子、視察報告: ユバスキュラ市の英語教育、東海大学教育研究所、研究資料集、無、23、2016、125-140

(9)Hiroko Suzuki, Miho Fujieda, Learning ESP vocabulary: An analysis through redefining the relationship between input and output *Language Education & Technology*、有、52、2016、299-318

〔学会発表〕(計 14 件)

(1)Peter J. Collins, Hiroko Suzuki, Designing an instructional framework to develop EAP literacy 54th RELC International Conference & 5th Asia-Pacific LSP and Professional Communication Association Conference (国際学会)、2019

(2)河野円、鈴木広子、平井清子、理系学生を対象とした EAP プログラムの開発 論理的思考を伴う言語活動の設計試案、Japan Association of Applied Linguistics in Japan Association of College English Teachers (JAAL in JACET) (国際学会)、2018

(3)藤枝美穂、オンラインコーパス分析ツール Sketch Engine を利用した ESP 語彙抽出の試み、ポスター・セッション、Japan Association of Applied Linguistics in Japan Association of College English Teachers (JAAL in JACET) (国際学会)、2018

(4)Miho Fujieda, Hiroko Suzuki, In search of pedagogical genre continuum in college ESP, The 2018 KOTESOL International Conference (国際学会)、2018

(5)Hiroko Suzuki, Madoka Kawano, A survey on how university first-year students understand and perceive “learning” English: Its design and results, The 57th JACET International Convention (国際学会)、2018

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

(6)鈴木広子、平井清子、河野円、大学入学時の学習者調査から示唆される EAP 教育へのアプローチ、全国英語教育学会 第 44 回京都研究大会、2018

(7)藤枝美穂、宮本節子、小原平、飯野一彦、鈴木広子、他 3 名、TED を利用した英語によるオンラインディスカッションの交流：学生アンケートの分析、第 23 回大学教育研究フォーラム、2018

(8)平井 清子、河野 円、鈴木 広子、高校英語から大学 EAP 教育への橋渡し教育のあり方 - 思考を伴う「発問とタスク」にフォーカスして、外国語教育メディア学会(LET)関東支部第 138 回 (2017 年度) 研究大会、2017

(9)鈴木広子、平井清子、PISA 型「読解力」育成 のためのリーディング活動の研究： 高校英語検定教科書の分析から、大学英語教育学会 (JACET)関東支部大、2016

(10)鈴木広子、リーディングにおける学習者の文脈化と内容の再構築過程との関係、大学英語教育学会 (JACET)国際大会 2016 、2016

(11)Hiroko Suzuki, Miho Fujieda、Vocabulary learning grounded in an ESP community: Design and effect of a basic medical ESP course、BAAL (British Association for Applied Linguistics Annual Meeting)2015 (国際学会)、2015

(12)菅原安彦、鈴木広子、保崎則雄、オンライン・ディスカッションにおける発話の生成過程の分析、外国語メディア教育学会(LET)全国大会、2015

(13)岡秀夫、河野円、鈴木広子、有嶋宏一、平井清子、シンポジウム：CALP を伸長する教育と検定教科書の役割について考える、大学英語教育学会 (JACET)国際大会 2015(国際学会)、2015

(14)鈴木広子、リーディングにおける学習者の文脈化と内容の再構築過程との関係、大学英語教育学会 (JACET)国際大会、2016

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況 (計 0 件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6 . 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：藤枝美穂

ローマ字氏名： Fujieda Miho

所属研究機関名：大阪医科大学

部局名：医学部

職名：教授

研究者番号 (8 桁): 20328173